病院図書館　2006；26(1)：13-15

特集　図書館づくりとレイアウト

関西労災病院の場合

寺澤 裕子

Ⅰ．はじめに

新築移転を終えた病院図書室レイアウトの一例として、関西労災病院図書室を紹介する。

当院は昭和28年に開業を始め、市立病院のない尼崎市内でその役割を自他ともに認めつつ、現在診療科20科（神経内科は一時休診）、病床数670床、主な職員数は、医師約140名、看護師約410名。一日平均外来患者数1,600名、一日平均入院患者数548名で、病院運営を進めている。

Ⅱ．移転前の当院図書室概要と担当者の私

移転前の図書室は病院の管理棟に位置し、医局の休憩コーナーを挟んだ状態で、医局とゆるやかに隣接していた。このような位置関係のせいか、24時間開放されていながら「図書室は医師用」と思われているふしがあり、同じ階にあった看護部には看護師用の図書コーナーが別に設けられていた。

担当者である私は当時より医局秘書と図書室を担当していたが、移転により医局と図書室の場所が離れた現在は、医局秘書業務の総括をしながら、主に図書室に在席して業務を行っている。

Ⅲ．病院全体の増改築が完了：図書室の位置

敷地内の建物は大きく分けて管理棟、病棟、外来棟の三つで、移転後の図書室は外来棟に設けられた。当時の院長の早川先生が、その外来棟の最上階に研究ゾーンを策定し、その一角に図書室を設けたものである。このゾーンには現在労災疾病研究センター、治験事務室、医療安全推進室などがあり、研究施設として整備されている。

Ⅳ．10年後にも使える図書室づくりを

「そろそろ医局も図書室も移転ですね」とドクターとお茶を飲みながら話をしていたある日、新外来棟の設計・設備に関する職員アイデア募集の院内報が届き、あわせて病院長より「10年後にも使える図書室作りについて図書室担当者の意見を求めたい」という依頼が届いた。

移転前に使用していた什器類は以下のとおり。蔵書書架、新着雑誌書架、ビデオテープ類を収納しておく書庫、製本雑誌書架（ハンドル式のものではない手動タイプ）、を中心にさまざまな棚（ガラス戸つきのスチール棚など）を置いていた。1995年におきた阪神・淡路大震災時、被害を受けた図書室は、一部の書架を従来のスチール棚から木製のものに買い換えることができており、特に蔵書書架は耐震性の高い棚に買い換えられていた。

蔵書書架は棚数を増やしたがスペースは従来どおりなので、棚間隔が70cmと狭くなったこと、また天井部分の金具が照明をさえぎり、暗くなったことが問題点であった。また図書室にある窓が南に位置し、そこに面した蔵書類は背表紙が日焼け、乾燥していたが、ブラインドなどでなるべく日陰を作るということしかできない状態だった。

2000年３月９日下記の３点を問題点として挙げた。

１）蔵書書架の配置に問題あり、天井からの照

てらざわ　ひろこ：関西労災病院　図書室

明が十分でない。新図書室では光源について考慮してほしい。

2）1冊あたりの書籍が重たいため、閲覧机とは別に蔵書書架の周辺数箇所に気軽にページをめくることのできるコーナーテーブルがほしい。

3）雑誌、書籍の CD-ROM 化に対応した OA コーナーなどの設置。

この時点では院内のインターネット接続に対する方針が定まっておらず、従来図書室でのみ利用可能だったインターネット接続については図書室での利用者を多く見込んだ要望を出した。製本雑誌を置くスペースについてはオンラインジャーナル化が進む中ではあるが、その扱われ方がまだ確定していない時期だったので、ネットワークの整備程度の提案しかできなかった。

2000年6月8日、図書委員長と一緒に設計業者との打ち合わせに参加を始めた。病院側からの要望と、前述したような当方の要望を照らし合わせる作業が始まった。前述の要望点以外に、図書室内にファクシミリを設置すること、空調を図書室内で調整できるようにしたいことを追加で挙げた。

V．レイアウト作りを始める

図書室は縦に長く作られており、入口から順に、担当者のスペース（カウンター）を作り、目の届きやすいところに AV ブースや AV 資料書庫、パソコンやコピー機などの機器類を配置した。新着雑誌は利用が多いため、その書架を入口の近くにし、新着雑誌を手にとって読むことができる閲覧机を近くに配置した。次に蔵書書架を置き、製本雑誌書架は洋雑誌、和雑誌の順で図書室の奥へ配置した。また、閲覧机とは別に図書室内に仕切りを設け、利用者が集中して論文作成などにあたることができるような学習室を配置した（図1）。

大まかなレイアウトは、移転前の図書室と変わらないものになった。新しく設置されたもの以外での変更はコピー機が製本雑誌書架から遠くなったことである。

新しく設置された学習室は病院からの要望で作られ、そこで使用するノートパソコンや自身で持ち込んだ辞書などを入れておくロッカーも用意した。図書室内の電灯やエアコンのスイッチは入口にまとめたが、学習室には照明と空調のスイッチを独自につけ、24時間快適に勉強できるようレイアウトをした。

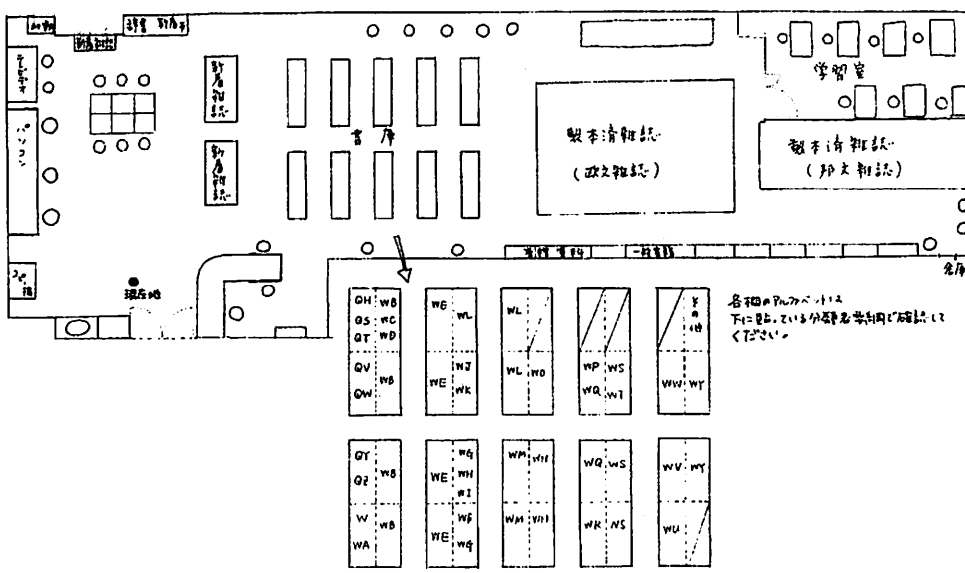

図1．

蔵書書架、製本雑誌書架付近には、閲覧机や学習室へ持っていく前にちょっとページをめくれるよう、小さな丸いすを棚周辺に置くようにした。

以上のようなレイアウトを図面へ落とし込む作業が完了した後は、什器の選定など図書室と病院側との話し合いになる。2001年12月11日備品についての最終打ち合わせを行う。予算の都合で一部スチール棚にせざるを得なかったが、買い足す書架類はほとんど木製品で統一できた。2002年２月８日より、新しい図書室が位置する外来棟の移転準備委員会に数回出席し、2002年４月20日外来棟へ移転した。

Ⅵ. 引越し前の準備：廃棄

従来からなるべく継続してそろえてきた製本雑誌は廃棄の対象とせず、蔵書については廃棄年の基準を1989年以前に出版された本とした。対象書籍は印をつけ、請求部署や利用者へ廃棄希望しないものを募った。業務上必要があり、図書委員長が認めている各部署持ち出し分についても同様に案内を出した。

Ⅶ. 引っ越して現在思うこと：サインも含め

新しい図書室への出入りは暗証番号式の電子錠で、職員は24時間利用が可能である。空調も独自に調整ができ、１年中快適な温度を保つことができている。

雑誌書架が電動書架になり、設置スペースをこれまで以上に必要としたため、蔵書架の間隔を広げることができなかったが、照明を棚の間に収めてもらい明るさの問題は解決できている（図２）。

図書室の引越しにあたっては、書架内の書籍類は業者が行う作業を監督する程度で済んだが、引越し後に苦労したことがひとつある。製本雑誌書架を新しくした際、各棚の高さはＡ４サイズということを確認したのみで、当日業者が書籍を入れ終わってみると、BMJ、JNNP などのＡ４を少し超えるサイズの製本雑誌が高さ

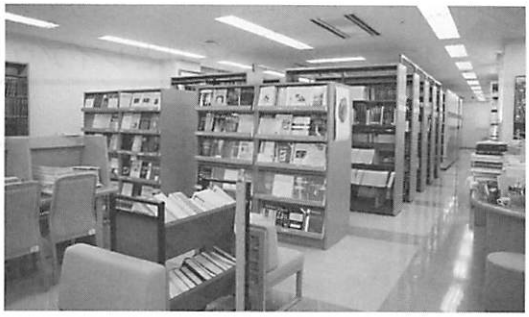

図２.

不足だったことに気付いた。これはあらかじめ考慮しておくべきだったと反省している。什器を新設される施設の場合は注意していただきたいと思う。

レイアウトで反省する点は、パソコンコーナーの横にコピー機を置いたことだ。パソコンコーナーは従来、医師が Web 閲覧やメールの送受信に主に使用していたが、医師は移転後医局の各机でインターネット接続が可能になったこともあり、現在は主にコメディカルが文書作成に利用している。静かに集中して考えたいとき、コピー機の音やコピーを利用する人の動線となる真横にパソコンを置いたことは、トラブル時の対処という点からだけでレイアウトすべきではないと思った。移動させることは可能なので、今後配置移動を検討したい。

室内サインについては、移転後に整備した。入口に可動式の粘着ボードの掲示板を設け、図書室のお知らせ事項などを載せている。

各書架には分類ごとの表示をし、雑誌、蔵書目録は図書室のパソコンから検索できるようにしているが、周知不足を感じる毎日であり、利用者が簡単に探すことのできる方法を考えている。そのひとつとして図書室のキャラクタを作成している。

医局秘書業務以外の業務も含め、なかなか図書室業務にかかることができないが、この原稿を機に、せめて利用者がストレスなく探している本や情報にたどりつけるよう整備したいと思っている。